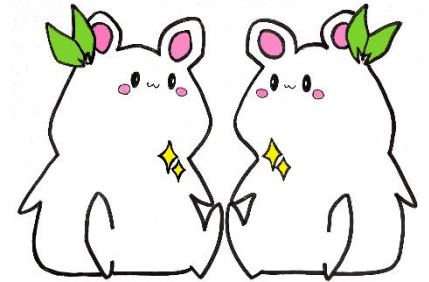


光が丘第二中学校 学校だより

特別号

- 1 「全国学力・学習状況調査」(3年)結果
- 2 「学力向上を図るための調査」結果
- 3 「東京都生徒体力・運動能力・運動能力調査」結果

(概要)



1 「全国学力・学習状況調査」(3年)結果

国語	生徒数	平均正答数	平均正答率 (%)	中央値	標準偏差
光二中	93	10.8 / 14	77	11.0	2.5
東京都	70,858	9.8 / 14	70	10.0	2.9
全国	891,820	9.7 / 14	69.0	10.0	2.9

数学	生徒数	平均正答数	平均正答率 (%)	中央値	標準偏差
光二中	93	9.1 / 14	65	10.0	3.2
東京都	70,865	7.6 / 14	54	8.0	3.6
全国	891,913	7.2 / 14	51.4	7.0	3.6

理科	生徒数	平均正答数	平均正答率 (%)	中央値	標準偏差
光二中	92	11.3 / 21	54	11.0	3.8
東京都	70,870	10.6 / 21	51	11.0	4.1
全国	892,585	10.4 / 21	49.3	10.0	4.1

3年生 国語

(実施日 令和4年度4月19日)

本校の平均正答率は「学習指導要領の内容」「評価の観点」「問題形式」の分類のすべてにおいて、国公立中学校の平均正答率を上回った。しかし、「知識及び技能」の言葉の使い方に関する事項の「文脈に即して漢字を正しく書く」分野において、平均を下回っている問題があった。

全体として正解率が50%を下回ることは少なかったが、「行書の特徴を踏まえた書き方について説明したものを選択する」という問題において、唯一46.2%という結果であった。また、「表現の技法について理解する」分野においても、62.4%という高くない数値であった。これは、先述の「漢字を正しく書く」と合わせて考えると、「知識」の定着が弱いことが分かる。

「自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書く」ことをねらいとした問題では、正答率は50.5%であった。また、「スピーチのどの部分をどのように工夫して話すのかと、そのように話す意図を書く」という問題でも、63.4%と低い正答率であった。このことから、「自分の意見の意図や根拠を明確にすることが苦手な傾向にあることが分かる。

普段から、繰り返し学習したり、なぜそうなのかと考えながら人の話を聞いたり、自分の意見を発するとき、なぜそう考えるのかを伝えたりすることが求められている。

3年生 数学

(実施日 令和4年度4月19日)

本校の平均正答率は「学習指導要領の領域等」「評価の観点」「問題形式」の分類のすべてにおいて、全国公立中学校の平均正答率や東京都公立中学校の平均正答率を大きく上回った。

しかし、問題別集計結果を見ると、「同じ偶数の和である $2n + 2n = 4n$ について、 n が9のときどのような計算を表しているかを書く」や「ある偶数との和が4の倍数になる数について、予想した事柄を表現する」「箱ひげ図のデータの個数と散らばりについて、正しく述べたものを選ぶ」の3つ問題が、東京都公立中学校の平均正答率とほぼ同じ値になっていることがわかる。

このことから、「問題場面における考察の対象を明確に捉えること」「結論が成り立つための前提を考え、新たな事柄を見いだし、説明すること」「箱ひげ図の分布の特徴を読み取ること」に課題があった。

以上のことから、具体的な事象の数量の関係をみつけて文字を用いて表す力、その式の意味を読み取る力、文字を用いた式を具体的な場面で活用して説明する力、四分位範囲や箱ひげ図の意味を理解する力が求められる。

3年生 理科

(実施日 令和4年度4月19日)

本校の平均正答率は「学習指導要領の領域等」「評価の観点」「問題形式」の分類のすべてにおいて、全国公立中学校の平均正答率や東京都公立中学校の平均正答率を大きく上回った。

しかし、問題別集計結果を見ると、「分子のモデルで表した図を基に、水素の燃焼を化学反応式で表す」や「おもりに働く重力とつり合う力の矢印を選択し、その力について選択する」や「昆虫類かどうかアリと比較しながら、観点と基準を明確にして判断する」の3つの問題が全国公立中学校と東京都公立中学校の2つの平均正答率よりも下回った。

このことから、物質を化学式で表すこと、化学変化の前後で原子の数が変化しないこと、力の働きに関する知識が身に付いていないこと、昆虫ではない生物と昆虫の相違点を外部の形態から分析し解釈することに課題

があった。

以上のことから、自然の事物・現象の基礎的・基本的な理解力や、事象の観察から抽出した情報を分析して解釈し、判断し推論する力が求められる。

3年生 質問紙調査

(実施日 令和4年度4月19日)

- ①「毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか」という質問に対して、全国、東京都は約36%が「している」と回答したが、本校の「している」の回答は約43%である。また、「毎日、同じくらいの時刻に起きていますか」という質問に対しては、全国、東京都は約57%が「している」と回答しているが、本校の「している」の回答は約58%である。このことから、睡眠時間をきちんと確保していることが分かる。
- ②「将来の夢や目標を持っていますか」「自分でやると決めたことは、やり遂げるようにしていますか」「難しいことでも失敗を恐れなくて挑戦していますか」という質問については、「当てはまる」の回答が、全国、東京都と比べると、約8%低い。しかし、「自分には、よいところがあると思いますか」という質問については、「当てはまる」の回答が、全国、東京都と比べると、約4%高い。このことから、今年度は様々な行事が実施でき活躍する場が設けられたため、自己肯定感が少し高くなったことが分かる。
- ③「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）」という質問に対して、「3時間以上」という回答が全国では約10%、東京都では約14%であるのに対して、本校では約21%と高い。また、「土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）」という質問に対して、「4時間以上」という回答が全国では約7%、東京都では約11%であるのに対して、本校では約14%である。このことから、日常生活で学習することの意識が高い生徒が多く、ご家庭の学習への関心度の高さが伺える。

2 「児童・生徒の学力向上を図るための調査」結果

(実施日 令和4年度 5月16日(3年)、6月3日(2年)、6月14日(1年1組)、6月17日(1年2組)、6月13日(1年3組))

今年度も東京都では児童・生徒の学びに向かう力等に関する意識調査および学校の指導方法の分析による成果と課題を検証し、指導のさらなる充実や組織的な授業改善等に役立てるとともに、そのような取組を通じて自動・生徒の学力向上につなげていくことを目的として「児童・生徒の学力向上を図るための調査」を東京都の全公立小中学校で実施しました。

本校ではその調査結果と5教科(国語・社会・数学・理科・英語)による分析を各教科3観点に則り、教科部会で検証しまとめたものをここに公表いたします。

ご家庭においても、お子様の個人表をもとに、今後の学力向上に向けた取組につなげていただければと思います。以下は各教科の分析結果のまとめです。

<国語> (1は「知識・技能」の観点、2は「思考・判断・表現」の観点、3は「主体的に学習に取り組む態度」の観点)

1	<成果>漢字ワークの提出、漢字テスト等、家庭で事前に学習してから臨むことができている。毎週の取組が、自信になっている生徒も多い。
	<課題>文章の中で、正しい語句の選択ができるように、様々な文章に触れる機会を増やしていく。
2	<成果>毎回の授業のプリント等にしっかり取り組み、文章を書いて自分の考えをまとめることで、これまでの学習を振り返ることができている。
	<課題>「学習内容の理解」に対して、「得意である」との回答率が低い。自分の考えや表現に自信がもてるように、言語感覚を磨いていく必要がある。グループ活動を通して、自分の考えを発信したり、他の考えを聞いて、深めたりすることが楽しいと実感できる場の設定を、単元ごとにどう設定するのか、模索していく。
3	<成果>分からないことがあれば、質問したり、発言したりできる。提出物等、期限を守って出そうとする意識が高い。
	<課題>文章の読解にとどまらない、探求心を育む必要がある。「考える」ことに積極的になるような仕掛けを模索したい。

<社会>

1	<成果>・学習内容の理解度が東京都よりも高く、「よく分かる」「どちらかといえば分かる」の回答は東京都が約82%に対し、本校が約91%である ・単元振り返りシートの提出、単元ごとのテストなどに取り組むことで、深い知識を得ることができている。
	<課題>・学習内容の理解度に学年によってばらつきがあり、「よく分かる」「どちらかといえば分かる」の回答は本校の1学年は約93%、2学年は約86%、3学年は96%である。東

	京都の2学年の回答が約80%であり、本校生徒の回答率は高いものの、学年間のばらつきを是正すべく、指導方法の工夫やICT機器の有効的な活用方法を模索していく。
2	<p><成果>・单元ごとに学習内容を振り返り、自分の考えや学んだ内容をまとめることで、適切な情報を判断し、考える力および自分の考えを表現する力の育成に取り組んでいる。</p> <p><課題>・「授業では、他の人と考えを交流しながら課題を解決する活動を行っていると思う。」という質問に対して、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」の回答は東京都が約83%に対して、本校は約76%である。授業内で自分の意見を他者と交換する話し合い活動を取り入れる工夫が必要である。</p>
3	<p><成果>・提出物を期限に提出したり、意欲的に発言をしたり、積極的に学習に取り組むことができている。</p> <p><課題>・「分かることやできることが楽しい」と感じて学習に取り組む生徒が、東京都よりも若干下回るため、日常生活の事柄と結びつきながら、生徒に学習の楽しさを感じさせる授業づくりが必要である。</p>

<数学>

1	<p><成果>「知識・技能」はほぼ定着してきている。正確に計算する力や、三角形の合同条件・相似条件、また数学用語などを正確に理解して使いこなしている。</p> <p><課題>よく理解出来ているにも関わらず、「よく分かる」「どちらかといえば分かる」の回答が東京都の数値より少し下回っているため、簡単な問題の反復練習を家庭学習として促していきたい。</p>
2	<p><成果>難問を解く力が備わっている生徒が多くなっている。特に、3学年は顕著である。</p> <p><課題>苦手意識をもった生徒が多く、諦めてしまう傾向がある。生徒同士が伝えあい、教えあいの時間をとって楽しく演習する時間をとっていきたい。年間計画の中に位置づけていく。</p>
3	<p><成果>記述式課題やテストを行ったことで、答えを出すだけでなくその過程を表現することの大切さを伝えることができた。また、伝える楽しさを体感できている生徒も増えてきている。</p> <p><課題>主体的に取り組ませるために、家庭学習の必要性を感じさせ、その成果を味わわせる必要がある。日々の学習の中で生徒同士が伝えあう時間を作る必要がある。また、発表やグループ学習も工夫して取り入れる必要がある。</p>

<理科>

1	<p><成果>・学習内容の理解度が東京都よりも高く、「よく分かる」「どちらかといえば分かる」の回答は東京都が約81%に対し、本校が約86%である。</p> <p>・実験器具のパフォーマンステストや、单元ごとのワークシートや練習問題などに取り組むことで深い理解を得ることができている。</p> <p><課題>・学習内容の理解度に学年によってばらつきがあり、「よく分かる」「どちらかといえば分かる」の回答は1学年では東京都が約87%に対し、本校は約76%である。中学校の学習の取り組み方に対するギャップが少なからずあったのだと考えられ、指導方法の工夫やICT機器の有効的な活用方法を模索していく。</p>
---	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

2	<成果>・実験・観察のレポートを通じて、考察について考えたり、グラフや作図による表現力を高めたりすることで、科学的な思考力の向上につながっている。
	<課題>・「他の人と相談して、考えを深められるようにする」という質問に対し東京都の数値を若干下回るため、科学的な思考の発問や実験・観察での話し合いの中からも思考力を高められるような工夫が求められる。
3	<成果>・授業でのレポート提出の期日を守ったり、実験・観察や課題に積極的に取り組んだりしている。
	<課題>・学習内容に興味関心を持たせるとともに、身近な事象に直結させ、生活で生かせるような指導方法の工夫や教材等の開発を行っていく。

<英語>

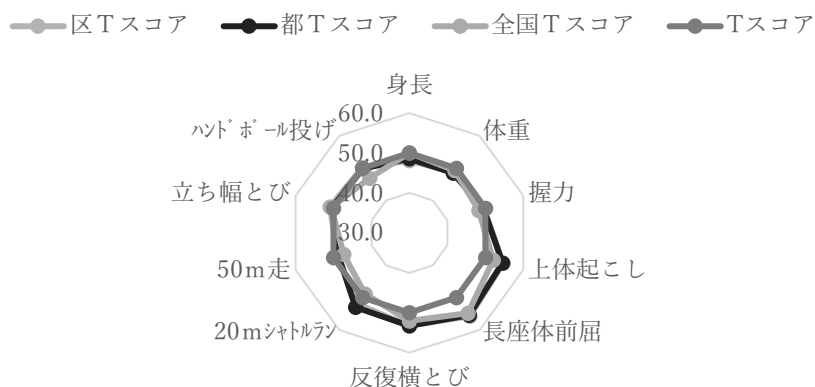
1	<成果>基礎学力は定着しつつある。学習内容の理解度が東京都よりも高く、「よく分かる」「どちらかといえば分かる」の回答は東京都が約 77.2%に対し、本校が約 84.1%である。
	<課題>学力の差が大きいのが本校の課題と言える。「どちらかといえば分らない」「ほとんど分らない」と答えている約 15%の生徒の学力をどのように保障するかを考えなければならない。放課後の個別学習、家庭学習の方法の指示、及び基礎学習事項の精選等を進める必要がある。
2	<成果>生徒の思考力・判断力が向上してきた。これは文法事項を機械的に繰り返し覚えるような授業から、常に使用場面と伝えるべき相手を意識した授業展開にしてきたためだと考えられる。
	<課題>知識・技能が不足している生徒にとって思考力・判断力を高める学習活動はハードルが高いものとなる。生徒の思考力・判断力を養う活動を行うと同時に、生徒のつまづきをモニターし、適切な指導を行えるようにする。
3	<成果>英語をコミュニケーションの手段として捉え、授業でペアワーク、グループワーク等のインタラクションを通じた活動を取り入れることによって、英語の授業を積極的に取り組む生徒が増えてきた。
	<課題>英語力の向上は授業だけで保証できるものではない。家庭学習の充実が不可欠である。課題を与えるだけでなく、どのような学習をすれば英語力が向上するのか生徒に指導する。またパフォーマンステストを実施するときは、評価基準を明確にし、生徒がしっかりと無駄なく学習できるように指導する。

3 東京都生徒体力・運動能力・運動能力調査結果 (実施日 令和4年度5・6月)

東京都生徒体力・運動能力調査は、握力(筋力)、上体起こし(筋持久力)、長座体前屈(柔軟性)、反復横跳び(敏捷性)、20mシャトルラン(全身持久力)、50m走(スピード)、立ち幅跳び(瞬発力)、ハンドボール投げ(巧緻性、瞬発力)の8種目を行い、体力の傾向を把握する。本校では、1学期に実施した。次に示すのは、各学年、男女別の体力の傾向である。

※Tスコア・・・区市町村、東京都、全国のそれぞれの平均を50とした場合の本校の偏差値

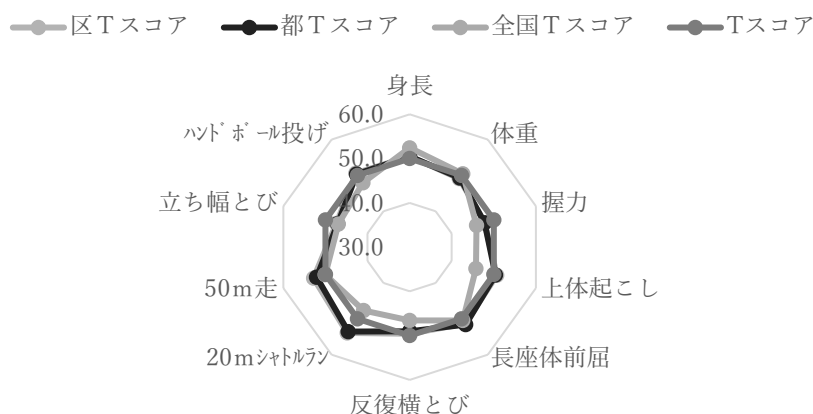
1年男子



1年男子	身長	体重	握力	上体起こし	長座体前屈	反復横とび	20mシャトルラン	50m走	立ち幅とび	ハンドボール投げ	体力合計点
学校平均	153.4	43.3	23.5	25.6	44.7	50.7	70.7	8.6	182.5	17.2	35.7
区Tスコア	48.1	48.8	49.7	54.6	55.8	53.2	52.1	48.9	51.0	50.2	
都Tスコア	48.6	48.6	49.5	54.5	55.5	53.3	53.0	48.7	50.3	49.9	
全国Tスコア	50.0	49.3	48.2	52.1	54.9	52.0	49.0	47.3	50.6	46.9	

1年男子の体力合計点は、区市町村、東京都、全国の平均を上回る結果だった。50m走以外は概ね平均より高い。特に、50m走のTスコアが低いことから、スピードを高める運動をする機会を増やす必要がある。

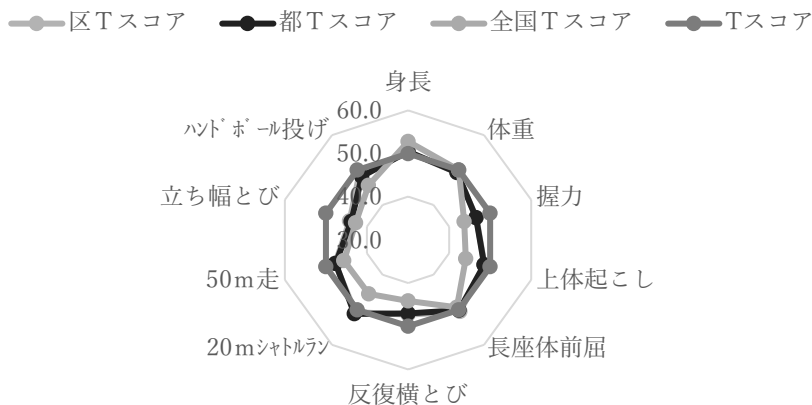
2年男子



2年男子	身長	体重	握力	上体起こし	長座体前屈	反復横とび	20mシャトルラン	50m走	立ち幅とび	ハンドボール投げ	体力合計点
学校平均	162.0	48.8	27.3	26.0	44.5	50.9	85.5	7.8	190.2	20.4	42.6
区Tスコア	50.5	49.1	47.8	50.7	51.4	49.6	54.0	52.8	47.4	50.7	
都Tスコア	50.5	49.3	47.8	50.4	51.6	49.0	53.6	52.1	47.1	50.4	
全国Tスコア	52.4	50.5	45.9	45.7	50.5	46.6	47.7	50.0	46.9	48.0	
R3年度学校平均	155.6	43.0	21.6	22.6	42.8	49.4	68.8	8.4	178.6	15.9	32.8

2年男子の体力合計点は、区市町村、東京都、全国の平均を上回る結果だった。昨年度（1年次）の体力合計点より全体的に向上した。握力、立ち幅跳びが低い傾向にあるため、筋力や瞬発力を向上させる必要がある。

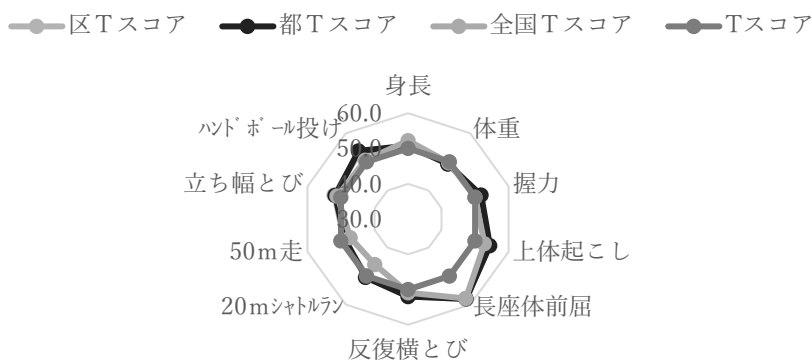
3年男子



3年男子	身長	体重	握力	上体起こし	長座体前屈	反復横とび	20mシャトルラン	50m走	立ち幅とび	ハンドボール投げ	体力合計点
学校平均	166.8	53.2	30.8	27.2	46.3	52.5	87.9	7.7	196.1	21.7	44.9
区Tスコア	50.3	49.3	46.7	48.6	50.5	47.3	50.7	47.8	44.3	49.1	
都Tスコア	50.5	49.3	46.6	48.5	50.1	47.1	51.2	47.6	43.8	48.2	
全国Tスコア	52.8	50.0	43.7	44.1	49.3	44.2	45.4	45.6	42.7	45.6	
R3年度学校平均	160.7	47.5	25.6	24.1	42.8	49.8	80.0	7.9	190.4	17.1	38.2

3年男子の体力合計点は、区市町村、東京都、全国のすべてで下回った。昨年度（2年次）の合計点よりは向上した。特に、立ち幅跳びなどの瞬発力や筋力を必要とする項目が低い傾向にある。

1年女子

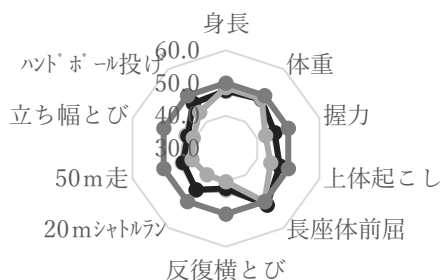


1年女子	身長	体重	握力	上体起こし	長座体前屈	反復横とび	20mシャトルラン	50m走	立ち幅とび	ハンドボール投げ	体力合計点
学校平均	153.2	43.2	22.0	22.5	50.8	46.0	45.8	9.2	167.4	12.1	47.7
区Tスコア	50.5	49.4	51.6	54.2	58.1	52.0	49.9	49.1	52.0	53.4	
都Tスコア	50.8	49.2	51.8	54.4	58.0	52.0	50.5	48.8	51.7	53.9	
全国Tスコア	52.2	49.7	50.0	52.8	57.9	50.9	46.0	47.2	51.1	50.7	

1年女子の体力合計点は、区市両村、東京都、全国のすべてで上回った。特に、50m走やシャトルランの走る種目で低い傾向にあった。スピード、全身持久力を高める運動が必要である。

2年女子

● 区Tスコア ● 都Tスコア ● 全国Tスコア ● Tスコア

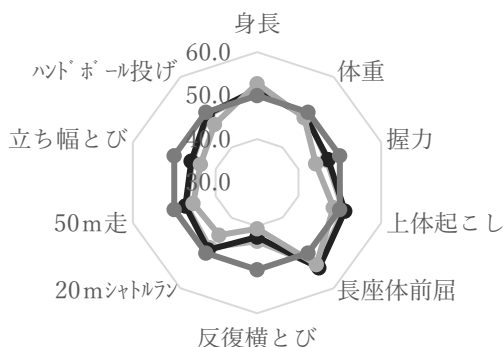


2年女子	身長	体重	握力	上体起こし	長座体前屈	反復横とび	20mシャトルラン	50m走	立ち幅とび	ハンドボール投げ	体力合計点
学校平均	154.2	45.7	21.0	20.6	46.7	41.4	41.7	9.3	150.3	11.0	40.7
区Tスコア	47.4	48.5	45.3	47.4	50.8	42.7	45.7	44.2	42.9	46.9	
都Tスコア	47.7	48.5	45.7	47.2	51.3	42.2	45.5	43.8	42.3	47.1	
全国Tスコア	48.6	48.6	42.7	44.3	50.1	40.2	39.9	40.9	40.6	43.7	
R3年度学校平均	151.1	41.4	19.9	19.5	45.8	43.2	37.8	9.2	153.1	9.3	38.8

2年女子の体力合計点は、区市両村、東京都、全国のすべてで著しく下回った。昨年度（1年次）の合計点よりは向上したが、全体的に体力は低い。特に、20mシャトルラン、立ち幅跳びが低いことから、全身持久力、瞬発力を高める必要がある。

3年女子

● 区Tスコア ● 都Tスコア ● 全国Tスコア ● Tスコア



3年女子	身長	体重	握力	上体起こし	長座体前屈	反復横とび	20mシャトルラン	50m走	立ち幅とび	ハンドボール投げ	体力合計点
学校平均	157.8	48.2	23.0	24.0	51.6	42.5	50.3	9.0	160.5	13.0	48.5
区Tスコア	50.9	49.4	46.8	50.9	53.6	43.4	48.4	47.1	45.7	49.3	
都Tスコア	51.4	49.0	47.2	51.2	54.2	42.5	49.1	47.3	45.9	49.5	
全国Tスコア	52.8	48.5	44.2	48.5	53.3	40.5	44.9	45.4	43.7	46.6	
R3年度学校平均	156.2	46.7	23.0	24.9	51.2	49.4	53.6	8.8	165.3	11.6	50.4

3年女子の体力合計点は、区市両村、東京都、全国のすべてで下回った。また、昨年度（2年次）の合計点より低くなった。特に、反復横跳び、立ち幅跳びが低いことから、瞬発力、敏捷性を高める必要がある。

<全学年を通して>

1学年は、日頃から外遊びに出たり、放課後も部活動や外遊びに出ている生徒が多い。小学校の頃から継続して運動習慣がある者が多く、体育の授業を積極的に取り組んでいる。この運動習慣を継続させることが大切であるとする。

2学年は、1年次から体力が低い傾向にある。男女ともに体格が大きくなったこと、部活動や外部のクラブ活動、体育授業などを通して運動機会が確保されたことなどから、1年次よりは体力が向上したと考えられる。

3学年は、部活動を引退し、運動機会が大幅に減った者も多く、運動機会に差が出た。昼休みに外遊びする人は学年全体的に少なく、体育の授業以外で体を動かす機会がなくなっている。特に女子で体力の低下が心配される。

全学年を通して、柔軟性は高い傾向がある。手ごろな運動や気分転換となる動きは取り組みやすいためと考える。一方で、スピードを必要とする動きは低い傾向がある。日常の動きでは、素早く動く機会を確保することが難しい。

今年度は、1・3年生は授業の最初に補強運動を継続して取り入れたり、2年生は単元を通して持続的な動きや様々な動きを取り入れて準備運動を行ったりした。今後は、素早い動きや筋力を高める動きを積極的に取り入れていく。また、保健の授業などを通して、運動と健康の必要性についての意識を高める。さらに、昼休みの外遊びを促したり、部活動の枠を超えて一緒に練習したりするなど、様々な運動を行う機会を確保していく。学校生活で学んだ動きや知識をいかして、日常生活の中の運動機会を増やし、習慣づけることが必要であるとする。